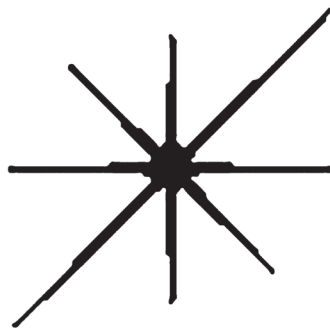


コメット通信 10

[21年5月号]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

【特集 『新型コロナウイルス感染症と人類学』を読む】

〈地球の慢性疾患〉とともに生き、考えるために
松嶋健—————3

パンデミックとパンデミック性
美馬達哉—————6

読者への開かれ
田中功起—————8

あたたかいツッコミ
飯田淳子—————9

【連載】

短歌から川柳へ
——裸足で散歩 10
西澤栄美子—————11

【特集 『新型コロナウイルス感染症と人類学』を読む】

〈地球の慢性疾患〉とともに生き、考えるために

松嶋健

コロナ禍のなかでコロナ関連の本が続々と出されているが、50年後、読むに堪えるものはどれほどあるだろう。今回のパンデミックほど、事態の推移が全世界的に実況中継され即時的に共有された出来事はかつてなかったであろうが、虚実入り乱れた情報や知見が日々増殖し、対応も次々と変転するなかで、何を見聞きしどう思考すべきかということ自体、それほど明らかなものではない。例えば、感染者数を減らすことが疑問の余地なき目的であるという前提で様々な「専門家」が議論をし、人びとの多くもまた感染者数の増減に一喜一憂しながら毎日を過ごしているように見える。しかし、この当たり前のように実況中継されている奇妙な状況は何なのだろうか？ そもそも「感染者数」とは一体何なのか？⁽¹⁾

人類学者はこれまで、何を観察するかあらかじめ定めかたではないようなフィールドで様々な物事に会い、そこでの経験と、自らが生まれ育つ過程で身につけてきた暗黙の前提との「あいだ」で思考してきた。複数の場を往還することによる異化と相対化を特徴とするこうした思考法は、多くの場合、空間的に離れたフィールドのおかげで可能となっていたが、今回のパンデミックでは、渡航の制限や禁止によってそういう意味でのフィールドはほぼ失われた。しかし、「自分のフィールド」への固執から離れてみると、代わってそこには異化された日常世界が、しかもグローバルに同期するかたちで現れたのである。それは、自分が生きている「此処」が〈フィールド〉になったということにほかならない。そうした〈フィールド〉はもはや空間的に境界づけられるのではなく地球全体に広がっているが、同時に各人の身体とその生活の場、これまでに培ってきたつながり、アクセスするメディアなどによって限定されてもいる。

本書は、人類学者が医師らとともに、それぞれの〈フィールド〉での異化された日常のなかで紡いだ思考の記録である。そこには、未知の洞窟の暗がりを一歩一歩不安とともに進んでいく現在進行形のドキュメントという側面が見られる。しかし、だからと言って現場からの多様な報告だけに終わってはいない。個々のフィールドでの具体的内容と同じくらい、あるいはそれ以上に重要な〈構え〉は、本書の題名『新型コロナウイルス感染症と人類学』の「と」に示されている。

and であると同時に with でもあるこの「と」には、医療人類学における、例えば「糖尿病患者」から「糖尿病と生きる人びと」への視座の転換、さらには人類学的営為をめぐる、例えば「サーミについての人類学」と「サーミとともにある人類学」の差異についての思索が甞している。この後者の点に関して本書の編者らは「はじめに」でこう説明している。「少し戯画化して捉えるならば、『パンデミックについての人類学』とは、世界各地で経験されたパンデミックの流行の仕方やそれへの人びとの対応を集めてカタログを作るような作業である。それに対して、『パンデミックとともにある人類学』とは、ウイルスそのものの挙動やウイルスへの人びとの対応から、人間や社会や世界についての何らかの新しい理解を導き出そうとするものである」⁽²⁾。

つまり、『新型コロナウイルス感染症と人類学』というタイトルには、「新型コロナウイルス感染症(について)の人類学」であったなら想像されるような感染症のあり方の地域的・社会的多様性、それへの対応や対処の文化的・制度的多様性の研究にはとどまらないという意味と、新型コロナウイルス感染症を対象化するのではなく内側から、ともに考えるという〈構え〉が刻まれている。そしてこの〈構

え)は二つの時間性を伴っている。

その一つは、コロナ以前に人類学者たちが掘り下げてきた思考の蓄積に関わる。ここ数十年、別々のところから生み出されてきた議論、例えば、アクターネットワーク論、医療人類学や環境人類学、リスクの人類学の議論、マルチスピーシーズ民族誌、存在論的転回や存在様態をめぐる議論など、人類学者自身にとっても異なる領域やアプローチの話だと考えられていたようなものが、コロナ・パンデミックにおいて縫り合わされ一つの大きな流れになりつつある。それはあたかも、各地で別々に預言されていた「何ものか」がある具体的存在の登場によって成就したかのような時間性である。

こうしたコロナ以前の予示的時間性との関係で導き出されるのがもう一つの時間性、コロナ以後というよりもまさに With Corona と呼ばれるべき時間性である。そのうち感染者数が減り、もとの日常に戻って、「あの年はコロナで本当に大変だった」と振り返ることができる一過性の出来事としてではなく（これなら「について」の思考で間に合う）、新型コロナウイルス感染症として現れているものの背後にある可視不可視のつながりについて、パンデミックとともに、ウイルスやコウモリとともに、そして今後も出現してくるだろう新たな感染症とともに、「根源」的に粘り強く考えなければならない、そういう共-持続するような時間性である。こうした共-持続において考えることが、症状(に見えるもの)に対する対症療法的な対処にとどまらず、長引く非日常に絶望するのでもなく、病いになるとは何を意味しているかを考え、生活習慣やライフスタイルを変えながら病いとともに生きるための力と実践をもたらすことになるのである。人類学という一見「不要不急の」学問は、直接病者をケアすることはしない代わりに、人間の身体と精神の健康を他の生物や微生物を含む環境と切り離さないかたちで捉え、そこへの注意を促すという意味において深くケアに関わることになる。

本書のなかで、倫理学者の大北全俊はコロナ禍で求められる「行動変容」が、感染しないためのリスク・マネジメントに腐心する個人のレベルに議論が終始していることを指摘しつつ、医療・公衆衛生倫理の文脈で語られるのとは異なる今後の世界のあり方に対する責任について論じている⁽³⁾。そうした、感染予防のための行動変容にとどまらない、いわばライフスタイルそのものの変容については、例えば近藤祉秋が、アラスカ先住民のあいだで起こった議論を紹介している⁽⁴⁾。そこでは、都市との行き来を最小限にするだけでなく、村を離れ、狩猟用のキャンプに長期逗留するという可能性が検討されたという。伝統的な生業への回帰が、物理的に距離をとるだけでなく、貨幣によって購入される加工食品への依存度を減らすことで、緊急時の食糧不足に備えるという側面をもっており、今回のような事態が長期化し頻発するようになると、さらに現実的な可能性を帯びてくるかもしれない。

こうしたアラスカの先住民の反応は、アメリカにおける「プレッパー⁽⁵⁾」の増加や日本における地方移住の動きとも呼応している。ただ、地方に移住し、自給自足とオフグリッドの生活をおくる人びとへのインタビューを通じて北川真紀が明らかにしているのは、それが緊急時への「備え」であることを超えて、世界との関わり方それ自体を「再編」するような行動変容につながっているということである⁽⁶⁾。それゆえ、地方移住やオフグリッドのような目立つものでなかったとしても、植物を育てる、鳥を飼う、コンポストを始めるといった日常のちょっとした行動変容が、異なる生命や時間性に対する知覚を開き、存在を変容させるものとして注意を向けられる。人間を超えたつながりに対する人類学的な思考と感性の開かれは、こうした「無数の生活革命が取るに足らないものとして埋もれることに抵抗」(p.162)する。

日常が異化されたというのは、人類学者にとどまらず、誰もが人類学的に思考しうることを意味する。しかしそのとき、方法やテクニックというより、ある〈構え〉なしでは、容易に既知のカテゴリーと枠組みの中での思考に陥ってしまう。そこで必要なのは、かつて人類学的思考についてレヴィ=ス

トローズが世阿弥の「離見の見」を参照したように⁽⁷⁾、その場にながらにして、他者のまなざし、彼方からのまなざしで自分と自分のまわりの出来事を照らし返す〈構え〉である。本書で示されたような人類学的思考は、パンデミックとともに人類学の外へと出てゆく。感染症といういわば〈地球の慢性疾患〉とともにいかに生きるかを考え実践するために。そのことの深甚な意味は、50年後、100年後、ますます明らかなものとなるにちがいない。

【注】

- (1) 「感染者数」については、本書『新型コロナウイルス感染症と人類学』所収の浜田明範の論考「感染者数とは何か——新型コロナウイルス感染症の实行と患者たちの生成」(p.128-145)を参照。
- (2) 浜田明範・西真如・近藤社秋・吉田真理子「はじめに」同書, p.13-14。
- (3) 大北全俊「新型コロナウイルス感染症——行動変容というリスク・マネジメントと責任」同書, p.85-109。
- (4) 近藤社秋「米国アラスカ州における新型コロナウイルスへの対応——自然資源豊かな地域ゆえのアイデアと課題」同書, p.227-247。
- (5) 「プレッパー (Prepper)」とは、アメリカ合衆国を中心に存在するカタストロフィに備える人びとのこと。自給自足するための農場やシェルター、武器や食糧の備蓄、狩猟採集の技術などを有しているとされる。
- (6) 北川真紀「コロナ危機下の生活『再編』をめぐるエスノグラフィ——移住・自給自足・オフグリッド」同書, p.149-166。
- (7) クロード・レヴィ＝ストロース『はるかなる視線1』三保元訳, みすず書房, 1986年。

執筆者について——

松嶋健(まつしまたけし) 1969年生まれ。現在、広島大学大学院人間社会科学研究科准教授。専攻＝文化人類学、医療人類学。主な著書には、『『プシコ ナウティカ——イタリア精神医療の人類学』(世界思想社, 2014年), 『トラウマを生きる』『トラウマを共有する』(2018, 2019年, いずれも共編著, 京都大学学術出版会), 『文化人類学の思考法』(共著, 世界思想社, 2019年), 『環世界の人文学——生と創造の探究』(共著, 人文書院, 2021年)などがある。

* 『新型コロナウイルス感染症と人類学——パンデミックとともに考える』(浜田明範・西真如・近藤社秋・吉田真理子編)は、2021年4月に小社より刊行されました。

【特集 『新型コロナウイルス感染症と人類学』を読む】

パンデミックとパンデミック性

美馬達哉

まずは、WHOによるパンデミック宣言(2021年3月12日)から1年以内で、人類学の立場から、グローバルかつ広範な論点を扱った論文集を出版した編者のみなさんに敬意を表したいと思う。

名は体を表すという言葉通り、本書『新型コロナウイルス感染症と人類学』は、まさしく「新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)」のパンデミック性、「と」をめぐる理論的考察、実践のなかでの「人類学」の果たす役割の三つの論点を取り扱っている。

なかでも重要なのは「と (ウィズ)」である。

そこには、ウィズコロナ社会という言葉が語られるときのネガティブさ——元の世界に戻ることはできず、嫌々ながらも新型コロナウイルスと共存していくしかないという語調——とは異なる意味が込められている。本書のなかでの「ウィズ」は、COVID-19に巻き込まれつつもCOVID-19とともに世界を創り上げていく当事者性と、COVID-19のウイルスだけによってすべての事態が覆い尽くされているわけではないという非全体性をあらわす言葉として使われている。それはまた、COVID-19と共に(ウィズ)ある人類学の謂いでもある。つまり、俯瞰や傍観する研究者でもなく、ケアに奔走する対策チームの一員でもなく、COVID-19にまつわる社会過程の伴走者としての人類学者の立ち位置がきっぱりと宣言されているとみることができる。

収められている16の論考では、世界のさまざまな地域でのエスノグラフィーを通じて、COVID-19の影響の多様性、人々と社会の対応の差異、普遍的なはずの生物医学や統計数字のローカル化などが具体的に示されている。日本のケースでは、介護現場とプライマリ・ケア医の思いが取り上げられている。COVID-19対策の「花形」としてメディアで取り上げられることの多い救急病院やICUではないところは、日常性の中での微細な変化のダイナミズムを見いだそうとする人類学らしさを感じさせられた(意図的というよりは調査の限界かもしれないが)。

2020年夏ごろまでの感染状況や対応状況が主に報告されているので、読者としては、ここで報告された地域や人々のその後が気になってくる。また、一つ一つの論文は短めであることもあって、続編や論旨の展開を知りたくなるので、本書所収の論文を元にした単著を待ち望む気分になる。その点で、編者たちはたいへんに商売上手(?)だ。

評者として、もう一步踏み込んでもらいたかったと思うのは、パンデミック性についての考察である。それは、「われわれはみなコロナ患者だ!」という帯を目にしたときの——中身を読んだときではなく——脱力感ともつながる。

本書の論考が書かれたときには判明していなかったが、2021年4月になって、2020年がどのような年だったかが少しずつ明らかになってきている。米国医師会雑誌(JAMA)の5月11日号によれば、米国での年間死者数は2019年に比べて2020年では16%増加という(年齢調整後)。そして、全体死亡原因の順位としては、1位は心疾患、2位はがんのままだが、COVID-19が3位に入っている(これまでの3位は事故による死亡)。しかも、心疾患や事故による死亡も最近5年のトレンドと比べて急増しているのだから、それらのなかにCOVID-19関連死亡が含まれている可能性が高い。

いっぽう、日本の国立感染症研究所が4月30日に発表したデータによると、暫定的解析では、

2020年の日本での全死亡数は例年よりも少ない。つまり、COVID-19のパンデミック（というか几帳面な個人衛生対策）は、日本の国民全体の健康には正味プラスの影響だった可能性が高い。すると、日本の2020年は、生物医学的にみれば、人間が死ぬことの少ない極めて「健康」な1年だったことになる。

この疾病負荷のローカルな差異の極端さは、グローバルな（一つの）パンデミックとしてのCOVID-19という支配的な見方を打ち砕く。この点は、本書の多様なエスノグラフィーでも示されている通りだ。ただ、もしパンデミックの断片性を正面から受け止めるなら、パンデミック性の基底にあるのは、COVID-19そのものよりも、社会的距離や金銭給付や移動の権利の停止や生活習慣の強制的均質化など緊急事態の出来とみることができないのではないか。これは、哲学者ジョルジョ・アガンベンが当初から指摘したこと（『私たちはどこにいるのか？』）であり、人類学者フレデリック・ケックも『[流感世界](#)』で新型インフルエンザ防疫による社会的交通の停止とゼネストを重ね合わせながら示唆していたことだ。

「われわれはみな例外状態を生きている！」

執筆者について——

美馬達哉（みまたつや） 1966年生まれ。現在、立命館大学先端総合学術研究科教授。専攻＝医療社会学、医療人類学、脳神経内科学。主な著書には、『リスク化される身体——現代医学と統治のテクノロジー』（青土社、2012年）、『生を治める術としての近代医療——フーコー『監獄の誕生』を読み直す』（現代書館、2015年）、『感染症社会 アフターコロナの生政治』（人文書院、2020年）などがある。

【特集 『新型コロナウイルス感染症と人類学』を読む】

読者への開かれ

田中功起

この書評を読んでいるあなたは本のタイトルに惹かれたはずだ。ならば、すぐに本書を手に入れるべき。ここにはあなたの求めるものがきっとあります。

進行中の出来事を前にしてひとはどのようにその状況に対処し、言葉にするのだろうか。

新型コロナウイルス感染症によるパンデミックは世界中で起こっている。感染対策の基本が人々の接触を避けるための隔離なのだから状況は似ている。しかし、あたり前のことだけでも、それぞれの地域には別々の社会があり、別々の文化があり、別々の政治がある。原因は同じでもまったく異なる状況がそこにはあるはず。

日々の変化に対処する行政と、ニュースを介した感染症対策専門家の言葉だけではどうしても個別の違いが見えてこない。何か足りないと思っていた。もちろんこの状況を見通す視点を獲得することは難しい。それでも進行中の出来事をなんとかとらえようとするための、暫定的でも、寄せ集め（ブリコラージュ）でもいいから、何か別の方法、別の言葉が必要だと思っていた。それは例えば哲学や詩、あるいは社会学、もしくは人類学などの言葉なのかもしれない、そう思っていた。

本書はそれに応えてくれる。

コロナ禍において、例えばバングラディッシュでの女性支援組織はどのような状況にあるのか、韓国ではどのようにマイノリティがコロナ禍でヘイトの対象になっていったのか、あるいは日本国内での生活はこの状況下でどのように再編されつつあるのか、もしくは身体の接触を避けたい介護の現場はどうなっているのか。より抽象的な議論もある。アクター・ネットワーク・セオリーによってウイルスと共にあることはどう読み解かれるのか、日々報道される感染者数はいったいウイルスの何を描いているのか。ひとつひとつのテキストは具体的なエピソードの数々（国境封鎖による科学殺虫剤の供給不足がどのような影響を社会に与えたのか。雨具をどのように防護服として使用するのか。緊急事態宣言下における自閉症者の状況などなど）を差し挟みながら展開する。

パンデミックを個別性に落とし込み、もう一度抽象度を上げて議論を組み立てる。本書には具体性と抽象性の往復が随所にある。進行中の状況に対してなんとか言葉にしようとする意志と方法論を提供してくれる。それらはすべて、さしあたりこういうことができる、というもの。今後の分析と検証のための材料の提供。本書でも言及されるアネマリー・モルの言い方を借りれば「手直し」の連続。いや、むしろそれこそが進行中の出来事との関係において重要なんだ。この本は、つまり、読者に開かれている。読者に、ともに考えることを促している。ウイルスとともに考え、本書の言い方を借りれば、この書籍自体が「協働的民族誌」のためのインビテーションでもあるんだと思う。

執筆者について――

田中功起（たなかこおき） 1975年生まれ。アーティスト。主な著書には、『必然的にばらばらなものが生まれてくる』（武蔵野美術大学出版局、2014年）、『リフレクティブ・ノート（選集）』（美術出版社、2021年）などがある。

【特集 『新型コロナウイルス感染症と人類学』を読む】

あたたかいツッコミ

飯田淳子

ある医師の話を紹介したい。この医師は家庭医として、ある地方の診療所で診療を行うとともに、その地域の行政組織や教育機関、福祉施設、業界団体などと連携して地域住民の健康を守るために様々な仕事をしている。新型コロナウイルス感染防止のための教育や助言などもそのひとつである。

その一環として、この医師は昨年（2020年）の10月に、ある障害者福祉施設を訪れた。それまでは施設に行くと、管理者にどのような対策をしているか、困っていることはないかなどを聞き、疑問などに答えるというスタイルを取っていたが、その時には、施設の利用者からも新型コロナウイルスについての疑問や困っていることなどを聞き、一緒に話すことになった。その施設には知的障害を含め、様々な障害をもつ人がおり、新型コロナウイルスについても、災害のように捉えている人もいれば、生き物として捉えている人もいたように、多様な捉え方をしていた。また、彼らが実際に普段の生活や作業の中で困っていることを聴くことができ、この医師は、それまで自分たちの中になかった当事者の視点に気づかせてもらったという。

何よりこの医師に強い印象を残したのは、その場の雰囲気であった。施設利用者の人たちはお互いの性質をわかっていて、突拍子もない質問や重複した質問が出て誰も答えず、あたたかくツッコミを入れたりフォローをしたりし合っていたという。この医師はそれまで感染対策として、消毒用アルコールの濃度や面会の可否などについて、「これはいい」「これはダメ」とチェックすることを求められる「ギスギス」「殺伐とした」現場ばかりに直面させられていたが、障害者の人たちが「イエスでもノーでもないみたいなの、そういった世界に少し引き戻してくれた」という。

新型コロナウイルス感染症の影響下に置かれた私たちは、医療専門職でなくても、日常的に、「これはいい」「これはダメ」という判断を迫られることが多くあり、他者との間にその判断のずれが生じた場合には葛藤を感じたり対立に巻き込まれたりする。やっかいなことに、その「善悪」は科学的な「正しさ」だけでは判断できない。新興感染症であるために科学的に明らかにされていない側面が多いためだけでなく、現状の感染防止策は生活全体にかかわるからである。

こうしたことにより、新型コロナウイルス感染症は、さまざまな面で道徳／倫理の問題を顕在化させる。「倫理」と言っても、それは人工呼吸器を誰につけるかといった、いわゆる生命倫理の問題だけではない。マスクの着用や人との接触、食事のとり方などといった微細な行為が誰かの生命を危機に曝す可能性があるという点で、現在、私たちは誰もが日常生活において、社会的実践としてのモラルリティを要請される。

近年の人類学における道徳／倫理に関する議論では、規則や規範ではなく、態度や感情、慣習的行為などといった身体的・経験的側面や（Zigon, J. *Morality: An Anthropological Perspective*. Berg, 2008）、人びとの文化的・社会的文脈に埋め込まれた側面に焦点が当てられている（Mattingly, C. *Moral Laboratories: Family Peril and the Struggle for a Good Life*. University of California Press, 2014）。その論者の一人であるシェリル・マッティングリーは、社会空間は潜在的な「道徳の実験室」とであると述べている。つまり、それはいかなる生が生きられうるか／生きられるべきかということに関する実験でもあるような経験が生み出される可能性のある空間である。

新型コロナウイルス感染症との向き合い方は地域や職業，社会的立場などにより，場合によっては家庭内でも異なることから，道徳／倫理のあり方も多様となり，しばしば対立や葛藤を引き起こす。しかも，それらの道徳／倫理のあり方は状況の推移に伴って変化していく。それゆえ，社会全体で連帯してこの危機に対処していかなければならないことを皆がわかっているにもかかわらず，具体的な場面になると連帯をしにくい状況となり，分断が深まっていく。

こうした状況を一気に解決するような特效薬は，残念ながら見当たらない。そんななか，私たちは上述の医師のように，障害者の人たちの態度から学ぶ必要があるのかも知れない。簡単なことではないが，自戒を込めて言えば，あたたかいツッコミが，時には求められるのではないだろうか。非難するのでもなく，見ないふりをするのでもない，そしてユーモアに包まれた，あたたかいツッコミ。なかなか高度な技だが，どうすればできるのだろう。これも答えはひとつではないが，さしあたり「お互いのことをわかっている」というあたりをヒントにしていこうと思う。

執筆者について――

飯田淳子（いいたじゅんこ） 川崎医療福祉大学医療福祉学部教授。専攻＝医療人類学。小社刊行の主な著書には、[『新型コロナウイルス感染症と人類学——パンデミックとともに考える』](#)（共著）がある。

【連載】

短歌から川柳へ

——裸足で散歩 10

西澤栄美子

マッチ擦るつかのま海に霧ふかし見捨つるほどの祖国はありや

寺山修司⁽¹⁾の『われに五月を』（1957年）の掲載歌です。この短歌は、敗戦後の心情を詠ったものですが、筆者もその後衛に属していた、全共闘世代の多くの人々にとっては、1969年の「挫折」とともにある歌となってきました。

ふるさとの訛りなくせし友といてモカ珈琲はかくまでにかし

これも有名な寺山の歌です。筆者は東京生まれですが、学生時代の春休みに能代の友人宅を訪れての帰途、同じ夜行列車に乗り合わせた「金の卵」たちの、夜半までやまないすすり泣きとともに、彼我を隔てるものに対しての、若い日の鬱屈した心情は、この歌とともに、今もありありと蘇ります。

見わたせば花も紅葉もなかりけりうらのとまやの秋のゆふくれ

浅沼圭司先生の『映ろひと戯れ——定家を読む』⁽²⁾は、プラトン、ヘーゲル、バルト、デリダを語りつつ、この歌のテキストとしての提示と分析を行っている、おそらく現在に至るまで唯一の定家の歌のテキスト分析であり、広く日本文学の専門家や、外国の研究者に読んでもらいたいものです。この定家の歌は、詩歌の究極の形のように思えます。

訝して山ほととぎすほしいまま

同僚に誘われて俳句を始めた筆者が、最も心惹かれる句のうちのひとつが、杉田久女⁽³⁾のこの句です。この句のもたらす高揚感、フェミニズムの先駆けの句という定説を越えた、詩人の魂の自由に起因するものと考えます。

……早送り……二人は…… ……豚になり終⁽⁴⁾

おはようございます※個人の感想です⁽⁵⁾

この2句は、アンソロジー『はじめまして現代川柳』⁽⁶⁾に掲載されており、筆者は近現代の短歌・俳句とは別次元のポスト・ポスト・モダンの川柳に出合った気がしましたが、川柳の「諧謔」や「風刺」の枠内にあるとも感じました。

おでこからアンモナイトを出すところ⁽⁷⁾

しかし、本書を読み進むうち、現代川柳の一部が、それらを越えて、川柳の「傍観者の視点」から出発し、果ては、シュルレアリストたちに大きな影響を与えた、ロートレアモン⁽⁸⁾の、「解剖台の上のミシンと雨傘との偶発的な出会い」の地点に至っているかのように思えました。

○○_○_○_○_○_○_○_◎_○_○_○_○_ (9)

この句は、コンクリートポエムを思わせます。

果てはシュルレアリスムの持つ、無意識のイメージや意味の連鎖をも断ち切ろうとして、逃げ続けるかのような、1997年生まれの暮田真名^{くれだまな}の句もあります。

いけにえにフリルがあって恥ずかしい

さかのぼる たとえ惣菜になっても

現代川柳は、詩の最前線にいるのではないのでしょうか。

【注】

- (1) 寺山修司 (1935 - 1983)。歌人、詩人、劇作家、演出家、映画作家、評論家。当時「短歌研究」編集長だった中井英夫は、1954年4月の五十首詠に、寺山の「チェホフ祭」を特選とした。
 - (2) 浅沼圭司『映ろひと戯れ——定家を読む』小沢書店、1978年（水声社、2000年）。同じ著者によって——『映画美学入門』、『昭和あるいは戯れるイメージ』、『〈よそ〉の美学』、『物語とは何か』、『ロラン・バルトの味わい——交響するバルトとニーチェの歌』、『映画における「語り」について——七人の映画作家の主題によるカプリッチオ』、『ロベール・ブレソン研究——シネマの否定』、『思考の最前線』（共編著）、『読書について』、『映画のためにI』、『映画のためにII』（いずれも水声社）。
 - (3) 杉田久女 (1890 - 1946)。この句は、1931年の作。
 - (4) 川合大祐 (1974 -)。
 - (5) 兵頭全郎 (1969 -)。
- 註4,5の両句は、2021年4月18日の『朝日新聞』朝刊《短歌時評》（「歌人が川柳に驚く」評者：山田航）に紹介された。
- (6) 小池正博編『はじめまして川柳』書肆侃侃房、2020年。
 - (7) 竹井紫乙 (1971 -)。
 - (8) ロートレアモン（本名：イシドール・リュシアン・デュカス）(1846 - 1870)。『マルドロールの歌』。
 - (9) 柳本々々 (1982 -)。

執筆者について——

西澤栄美子（にしざわえみこ） 1950年生まれ。もと成城大学講師。専攻＝美学、フランス文学。小社刊行の主な著書には、『書物の迷宮』、主な訳書には、クリスチャン・メッツ『映画記号学の諸問題』（共訳）、同『映画における意味作用に関する試論』（共訳）などがある。